



カレイ



かれんと いんぷおめ〜しょん

2007.12.1 発行：No.59
TEL 03-3985-2628
立教大学図書館

使っていますか、オンラインデータベース？

■「オンラインデータベース」ってなに？

今では身近になったYahoo!やGoogleは便利な検索エンジンですが、たどり着いた情報が正確かどうか見極められない、といった経験はありませんか？本学図書館で利用できるオンラインデータベースでは、インターネットを利用して出典の明らかな情報を検索することができます。

例えば、新聞社のデータベースを使えば、新聞の縮刷版の端から端までを探さなくても検索ボタンひとつで関連した記事までたどり着くことができます。一部のデータベースでは、記事上のグラフや写真を確認することもできます。

また、洋雑誌のデータベースでは、立教大学にない洋雑誌記事の原文を読むことができます。一部のデータベースには自動翻訳機能も付いています。

■「オンラインデータベース講習会」とは

図書館で行っている講習会では、膨大な情報の中から効率良く情報を収集する方法について、説明を受けるだけでなく、参加者自身がパソコン実習も行いながら確認していきます。なかでも、「オンラインデータベース講習会」は、講師をデータベース提供者から招いて実施しているため、内容の濃いものになっています。

「オンラインデータベース」という言葉は馴染みにくいかもかもしれませんが、日本経済新聞社のデータベース「日経テレコン21」は、様々な企業の情報や経済資料が検索でき、就職活動時にも大変便利なものです。また、法律情報のデータベース「TKCロー

ライブラリー」では、身近な事件の判決理由などの全文を確認することもできます。将来の裁判員制度を考えると、法律を学ぶ人以外にも重要な役割を果たすものでしょう。

■レポート・論文の書き方講習会

試験方法やレポートの課題が発表される頃には、「レポート・論文の書き方講習会」を実施しています。まず、レポート・論文作成において参考となる文献を紹介し、引用のルールや表記の仕方を確認します。また、著作権についても簡単に触れ、データベースで実際の学術論文の原文を確認するところまで説明をします。

■今後の予定 <レポート・論文の書き方講習会>

12月3日(月)～7日(金) 15:00～16:00

○池袋キャンパス・図書館本館

○新座キャンパス・新座図書館

カウンターでお申し込みください。

図書館を活用し、大学生活を有意義なものにしたいと考えています。

目次

使っていますか、 オンラインデータベース？	p.1
わたしの思い出～図書館・読書～ <読書ナビ>21回	p.2～3
「見て」ほしい10本の映画	p.4

わたしの思い出 ～図書館・読書～

冬は室内で暖かく過ごしてきたい季節。そんな冬は、読書に耽るのに絶好の季節ではないでしょうか。

そこで、今回は図書館や本との関わりについて先生方に文章をよせて頂きました。

若者よ、本を求めて、街に出よう

「先生、今日も燃えてらっしゃいますね」これは駅に近い古本屋のおやじさんに決まって言われる歓迎の言葉だが、その意味は二つ。まずは「労働者諸君、今日も一日ごころうさんでした」というねぎらいの、もうひとつは、今日も先生は来てくれたが、肝心の学生さんは全く来てくれなかったという嘆きで、こう言われると頭が痛い。

池袋西口には、70年代までは、早稲田に続く古本屋群があったが、今ではわずか三軒を残すのみ。それ

ぞれ立派にやってはいるが、そこに学生の姿はもはやない。

学生は本を買わなくなったし、本をほとんど持っていないようだ。本なら図書館にあり、それを利用すればいい、そう思っているなら、勘違いもはなはだしい。調べものに図書館が役立つのは確かだが、本読みの達人でもない限り、借りた本で読書をするのは土台無理な話で、やはり本は自分で所有してはじめて、じっくりと読めるようになるのだ。

皮肉なことに、今ぼくたちは、本

細川 哲士（文学部教授）

を手に入れる最良の環境の中におかれているのではないかと思う。世界中どこへ行っても、ワンコインで、プラトンやヴィーコそれにライブニッツなどの主要著作が手に入るところがほかにあるだろうか。

「店の前をひっきりなしに通る学生さんが、一年に一冊でも、それも100円の本でいいから買ってくださると、張り合いがあるのですが」そういう店番のおばさんの言葉を聞くと、どうにかしなければと思う毎日である。

読書は最も効率のよい自己投資

使い古された陳腐な言葉と感じる向きもあるかもしれないが、本も読まず教科書すら買わずに4年間を過ごし卒業する学生の多さに驚かされて以来、毎年1年生に「自分に投資しなさい」と言い続けている。母国語以上にはじょうずにならない英会話も自己投資の対象だろうが、大学時代に最優先されるべき自己投資はなんといっても読書だ。自腹を切っ

て本を買ひ、学生だからこそもっている時間を存分に使って読む。遊興、服などのショッピング、電話・メールなどに惜しげもなくつぎ込むお金と時間を読書に使うのはもったいないとばかりに、せいぜい読むのが情報誌やハウツーものでは振り回されるのが関の山。とうていintelligenceは身につかない。インターネットからの断片的な知識だけで要領よく単位を取っても、体系的に書かれた本をじっくり読まなければ大学で勉強したことを将来役立てることはできない。お金と時間を節約して読書するのではなく、読書して残ったお金と時間を遊興などに振り向けてほしい。お金と時間は必要なものにタイミングよく使ってこそ生かせる。

本は一日も早く購入していつでも読めるようそばに置く。たとえ自分のものでも本を汚したり傷つけたりしてはいけないと思っている人は多

松山 伸一（理学部教授）

いが、気がねなくアンダーラインを引き書き込みをしてよい。重い本は各章ごとに切り分け携帯しやすい形に綴じ直してよい。きれいなままほこりをかぶるより、よれよれになっても役立ってもらったほうがよいにきまっている。たった数千円～数万円の本が自分の一生を決定づけ、人生を支えてくれたら、元が取れるどころか、死ぬまで利益を生み出してくれる打ち出の小槌となる。こんなに効率のよい投資がほかにあるだろうか。お金と時間に躊躇して読むべき本を読まなかった場合の逸失利益の大きさに恐怖を感じてほしい。まさに今が自分に投資する絶好のチャンスなのだ。

私のルーツ「図書」

萩原 なつ子(社会学部准教授)

家にたくさんの本があったことや、物心ついた頃から祖母が絵本の読み聞かせをしてくれたせいか、幼少の頃から本に親しんでいたように思う。とくに伝記が好きで、書棚の世界偉人伝の全集が愛読書だった。とりわけアメリカ初代大統領のワシントンや、ダイナマイトを開発し、後にノーベル賞を設けたノーベルの話がとても面白くて、繰り返し読んだ。また、いくつになってもディズニーランドが大好きなのは、クリスマスに父母から贈られたディズニーの絵本を、何度も何度も読んでいたからなのかもしれない。

小学生時代は、図書の貸出カードがいっぱいになるのが嬉しくて図書室に通っていた。ちょっと背伸びをして難しい本をよく借りていた中学

生時代は、司書の先生がいろいろな本を薦めてくれた。中でも、『橋のない川』（住井すゑ著、第1-6部、新潮社、1961-1973年）に衝撃を受けたのを今でも覚えている。私が差別や戦争・平和などの社会問題に関心を持つきっかけを与えてくれた本である。高校生時代は本を読む場というよりは、受験勉強の場として図書館に通いつめた。そして晴れて大学生になり、英文学科時代に読んだ未婚の母となった女性を主人公にした小説『礪白』（M・ドラブル著、小野寺健訳、河出書房新社、1980年）はフェミニズム思想を、社会学科で学びはじめた時に読んだエレン・リチャーズ・スワローの伝記、『エコロジーへのはるかな旅：学際科学の創始者エレン・スワロー』（ロ

ロー』（ロバート・クラーク著、工藤秀明訳、ダイヤモンド社、1986年）は環境問題を学ぶ引き金となり、大学院の研究活動の礎になり、現在の研究活動にまでもつながっている。

本は私たちにたくさんの情報と知識を与えてくれ、夢を見させてくれる。時には読む人の人生を変えることだってある。そのくらい影響力があるものだと私は思う。今はインターネットで本が買える時代になり、将来は本のコンテンツがどこでも、簡易に配信が可能となり、デジタル図書館が普及しているのだろう。でも、私は本屋さんや図書館でゆっくりと背表紙を眺めて、気になる本を手に取り、ページを開く瞬間を大事にしたい。

図書館と私

福山 清蔵(コミュニティ福祉学部教授)

文学部教育学科の学生であった私は2年生の終わるところから少しずつ児童心理学に関心を持ち始めていました。当時豊島区要町・千川の近くで「子ども会」活動に参加していたことから、子どもたちの生活や遊びや家庭環境などについて、当時真剣に考えていました。

ある日、図書館で調べていたら「A. ゲゼル」という心理学者の書いた『発達心理学』の本に出会いました。その本は「原書」だったので、自分も大学生になったのだという感慨のほうが大きくて、中身は全く理解できませんでしたが、いつも夕方

になると図書館の薄暗い参考室でその本のページをめくっていました。

この本を選んだもう一つの理由は「写真」がふんだんに挿入されていたからです。当時英語で専門的な本を読む力はなかったけれど、写真は私でも楽しむことができました。その後、学科の講義で「ゲゼル」という名前を聞いた時には特別の感動がありました。この本は赤ちゃんから小学生までの発達の様子が描かれていたのですが、この著者が有名な発達心理学者であったことは後の講義で知りました。そして、私の心理学志向は決定的になっていき

ました。当時私は教育学を学んでいましたから、分野としては「教育心理学」ということになりましたが、その後、大学院に進学して徐々に「臨床心理学」の方向へと進んでいきました。

子ども会のことと並んで学生時代の記憶にいつでも登場するのが、図書館の片隅でページをめくったゲゼルの本との出会いです。すでに当時から相当古い本でしたが、記憶は今でも新鮮保存されています。

いつも、図書館階段下で待ち合わせ、現在の妻と語らったことは、もっとおおきな大切な記憶ですが…。

※文中にあげられた資料はすべて立教大学で所蔵しています。

私は映像身体学科で、映画を「見る」ということを中心に授業を進めています。あらためて、見るに括弧を付けるまでもなく、映画は見るものではないのか、と疑問に思う方もいるでしょう。いるでしょうどころではなく、ほとんどの方がそう思うのではないかと思います。しかし、少し振り返ってみて、私たちが何々の映画を見たとき、私たちは果たしてその映画の何を見た、と言っているのでしょうか。

授業の始めに、学生に「最近何か映画を見ましたか」と問うと、「これこれの映画を見ました」という答えが返ってきます。それで次に、「その映画の最初の画面には何が写っていましたか」と聞くと、多くの学生は「忘れました」と答えます。「でも、あなたはその映画を見たんですよね」と念を押せば、学生は「はい」と答えます。映画の冒頭の画面に何が写っていたのかをすっかり忘れていても、私たちはその映画を「見た」と堂々と言えます。私にしても、これまでに見たすべての映画の冒頭の画面が何であったか、そんなことはほとんど忘れていきます。それがいわば当たり前です。しかし、では私たちは映画の何を見ているのでしょうか。

結論から言えば、私たちは多くの場合、映画を見ているのではなく、「読んで」います。冒頭の画面に何が写っていたのかを忘れても、その映画を見たと言えるのは、映画を見たのではなく、読んだからです。その「読み」に、直接関わりのない画面のことはさっさと忘れていくのです。しかし、その「読み」を可能にしたのは、私たちがその映画の画面を見たり、台詞や音を聞いたからです。つまり映画は、それを見る人の「読み」を可能にするために、画面を「見せ」、音を「聞かせ」ています。では、映画は「見る」ものではなく、最終的には「読む」ものなのかといえ、決してそうではありません。

たとえば、アルフレッド・ヒッチコック監督の『サイコ』(1960)では、ひとりの女性が、街道からはずれた古びたモーテルに迷い込みます。彼女はそこで1泊することにしますが、彼女がバスを使う様子を、モーテルの主人が、隣の部屋の壁に開けられたのぞき穴から盗み見します。このとき、その主人の瞳がクローズアップで写されます。このクローズアップは、「読み」としては、主人の邪な欲望の強調といえるでしょう。主人は、やがて自分のそんな欲望を恥じるように、のぞきをやめます。

しかし、女性はシャワーを浴びている最中に何者かによって惨殺されてしまいます。そこでまた瞳のクローズアップが出てきます。息絶えた女性が風呂場の床にぐったりと倒れ、しかし瞳だけはカッと開いている、その瞳のアップ画面です。「読み」としては、殺しの残酷さの強調といえるでしょう。しかし、隣接するこのふたつのシーンに、ふたつの「瞳」のクローズアップがあることに気付くためには、この瞳の画面を「読む」のではなく、まさしく「見る」ことが必要です。その画面を「見た」者にだけ、まさしく「見えてくる」連関なのです。この連関は「読み」にはつながっていきません。だからどうした、という話してはなりません。ただ、映画はまぎれもなくふたつの瞳の画面を対比し、それを私たちにハッキリと見せているのです。「見る」ことを意識しないと、私たちはこの瞳を見逃します。

ここで『サイコ』を挙げたのは、たまたまにすぎません。どんな映画でもいいのです。すでに見た映画でもかまいません。自分のお気に入りの映画10本を、「読み」直すのではなく、「見」直して下さい。いままで見えてこなかった様々なものが、きっと見えてくるに違いないのです。映画は、何よりも「見る」ものなのですから。

ちなみに私のお気に入り10本は、以下です。

活劇映画の神髄を堪能する10本

- 『ダーティハリー』 (監督: ドン・シーゲル/1971)
 - 『突破口』 (監督: ドン・シーゲル/1973)
 - 『フレンチ・コネクション』 (監督: ウィリアム・フリードキン/1971)
 - 『M★A★S★H マッシュ』 (監督: ロバート・アルトマン/1970)
 - 『アウトロー』 (監督: クリント・イーストウッド/1976)
 - 『ガルシアの首』 (監督: サム・ペキンパー/1974)
 - 『ロンゲスト・ヤード』 (監督: ロバート・アルドリッチ/1974)
 - 『ブラック・サンデー』 (監督: ジョン・フランケンハイマー/1977)
 - 『宮本武蔵』 (監督: 加藤泰/1973)
 - 『遊び』 (監督: 増村保造/1971)
- (●: 新座図書館にて所蔵予定)

開館日程等については、図書館のウェブサイトでご案内しております。

(<http://opac.rikkyo.ac.jp>)

※その他変更がある場合はその都度、掲示でお知らせします。